

古代エジプトの「死後の世界」

内田 杉彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

The Afterlife in Ancient Egypt

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

要旨：現世の生活を理想とした古代エジプト人は、その「続き」である永遠の来世の存在を信じ、太陽神ラーと冥界の神オシリスの信仰をその主な支えとしていた。彼らの来世観念は、古王国時代には王の（神としての）再生を中心とするものだったが、古王国の崩壊は、王以外の人々にもそのような死後の再生への道を開き、「死者の審判」の観念をも生じさせた。

キーワード：来世，死，古代エジプト

Key words：Afterlife, Death, Ancient Egypt

1. はじめに

古代エジプトは来世に関する思想が大きな比重を占めていた文明である。この文明について我々現代人が思い浮かべるイメージには、ピラミッドやミイラなど来世に関わりを持つものが多く含まれるが、事実、エジプトの遺跡や遺物には神殿のほか、墓や葬祭に関連

表1. 古代エジプト年表

(ショー、イアン&ニコルソン、ポール(内田杉彦訳)『大英博物館古代エジプト百科事典』,原書房,1997の年表をもとに作成)

先王朝時代	(紀元前5500~3100年)
王朝時代	(紀元前3100~332年)
初期王朝時代	(第1~2王朝:前3100~2686年)
古王国時代	(第3~6王朝:前2686~2181年)
第一中間期	(前2181~2055年)
中王国時代	(第11王朝後半~第12王朝 :前2055~1795年)
第二中間期	(前1795~1550年)
新王国時代	(第18~20王朝:前1550~1069年)
第三中間期	(前1069~747年)
末期王朝時代	(第25~31王朝:前747~332年)
ギリシア・ローマ時代	(紀元前332~後395年)

したものが多い。これは神殿や墓がしばしば石材を用いて砂漠に作られるか岩窟の形をとり、遺跡として残りやすかったためである。墓と神殿が永続的な建材—石材—で作られたという事実は、来世が神々の世界と同様に永遠のものとされていたことを示す。事実、死後のための準備は当時の人々にとって当然の義務であり、しかるべき地位と財産を持つ者はそれにふさわしい墓の造営を人生の目標として、そのためには時間と費用を惜しまなかったのである。

古代エジプト人はなぜそれほどまでに死後の準備に力を注いだのであろうか。彼らは「死」をどのようにとらえ、受け入れていたのだろうか。このような疑問に答えるためにはまず、彼らの暮らしていたナイル流域の風土に目を向ける必要がある。なぜならエジプト文明の基本的な性格は自然環境によってかなりの程度まで規定されており、とりわけ「死」と「来世」に関する思想はその典型と言えるからである。

2. エジプトの気候風土と来世思想^{1) 2)}

現在のエジプトの国土は大部分が砂漠であり、人口はわずかな緑地、とりわけ南北に細長いナイル流域に集中している。農耕・牧畜を基礎とした文明がこの地に栄えたのは、ひとえにナイルとその氾濫の賜物と言えるだろう。ナイルの氾濫は、19世紀末以降に水門やダムが建設されるまでは毎年7~10月にナイル河谷の大部分を水没させ、その後に残された豊かな水分と肥沃な泥が多くの収穫をもたらしたのである。

氾濫のもたらす黒い土が堆積したナイルの谷を、古代エジプト人はケメト(「黒い土地」と呼び、自分たちの祖国とみなした。そこは自然の恵みに守られ、動植物の生命が育まれる「生」(生命)の領域であったが、その東西には、氾濫が及ばない不毛の砂漠(「死」の領域)が隣接している。この砂漠、とりわけ太陽の沈む

(死ぬ) 西の砂漠は、死者が葬られる場所でもあり、その意味でも「死」の世界であった。

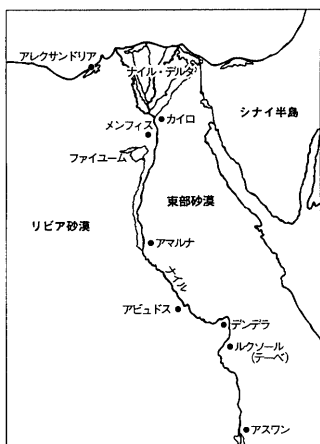


図1. エジプト略図



図2. ナイルの谷と砂漠 (中部エジプト)

この「死」の世界 (砂漠) と「生」の世界 (ナイル河谷) を隔てるものは、ナイルの水が達する位置を示す1本の境界線にすぎず、特にデルタ地帯より南では、狭いナイルの谷から砂漠とそこに営まれた墓地を間近に眺めることができる。水と緑に覆われた「生」の世界と不毛の「死」の世界が隣りあっているという現実を、死がすぐ身近にあって避けようのないものであることを強く意識させたであろう。古代エジプト人にとって現世の生活は、周囲を「死」の世界に取り巻かれているだけに、かけがえのないものであり、ナイルの谷こそ自分たちの生きられる唯一の、そして理想の世界だと思いは彼らの心情に共通するものだったと考えられる。しかし当時の平均寿命は25~35歳程度と推定されており³⁾、現世の生活は、まさにつかのものにすぎなかった。

身近で不可避の「死」、そして幸福ではあるがはかない現世という認識からは、死を恐れつつもそれを宿命として受け入れ、現世の生活をせめて死後に続けたいという願望が生じる。事実、ナイル河谷の自然環境は、厳然たる「死」の存在を感じさせただけでなく、自然界に存在する「生命」の力が「死」を克服することを

示すものでもあった。夕方に没する (死ぬ) 太陽が翌朝に再び出現し (生まれ)、エジプトの国土がナイルの氾濫によって豊かな「黒い土地」に生まれ変わる現象は、死の次に再び生がめぐってくることを暗示し、人々に死後の再生への希望を与えたのである。そしてそのような来世に対する願望は、太陽神ラーと冥界の神オシリスの信仰に反映されていると言える。

3. ラーとオシリス^{2) 4) 5)}

古代エジプト人は太陽を古くから太陽神ラーとして崇め、太陽が天空を移動し、光と熱を変化させていく様子を、毎日繰り返されるこの神の生涯とみなしていた。太陽神は夜明けとともに誕生し、昼間には壮年となり、夕方には年老いて西の地平線に沈む (死ぬ) と信じられていたのである。太陽神が東の地平線で生まれ、西の地平線で死ぬという生涯を繰り返し、死者が砂漠の地下に埋葬されるという事実は、死者の世界 (冥界) は地下にあり、太陽神は夜間にこの冥界を西から東へ旅して天上界と冥界をめぐる旅 (死と再生) を永遠に繰り返すとする概念を生んだ。この永遠の旅は舟 (「太陽舟」) によって行われるとされ、死者はこの船旅に加わることによって、太陽神と同じく永遠に死と再生を繰り返すことができると信じられるようになったのである。

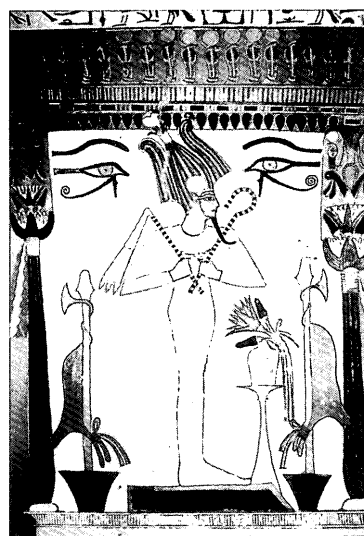


図3. オシリス (新王国時代の墓壁画より)

一方、冥界の支配者とされたオシリス^{6) 7) 8)} はまた王権の神でもあり、この神の図像は、包帯を巻かれたミイラの姿をとるだけでなく、王権を象徴する杖と穀竿を手にし、王冠を戴く姿とされた。また、冥界すなわち地下の神であったオシリスは、エジプトの肥沃な国土とそこに実る穀物の生命力を象徴する神ともみなされるようになった。これはオシリスの図像が彩色される場合、肌の色が黒 (ナイルが堆積させる泥の色) や緑 (植物の色) に塗られることで表される。新王国時

代の副葬品である「オシリスの苗床」(オシリスの姿をかたどった木枠に湿った土を詰め、穀物の種子をまいたもの)は、穀物が発芽する力が死者の復活を助けるとする考え方にもとづくもので、そのような豊饒の神としてのオシリスの性格が死後の再生とも結びついていたことを示している。

「オシリス神話」によると、王権の神オシリスは弟のセトに殺害されるが、妻のイシスの助けで復活を遂げ、来世の王となって永遠の生命を獲得し、息子のホルスが仇のセトを倒して亡き父の王権を受け継いだとされる。この神話は、世界(エジプト)と宇宙の成り立ちを説く「創世説話」、とくに「ヘリオポリス神学」の一部が発展したものと考えられる。この「ヘリオポリス神学」では、原初の海(ヌン)から浮上した最初の陸地(「原初の丘」)に太陽神が出現して天地創造を開始したとされ、最初に生じた「大気」の神シュウと「湿気」の女神テフヌトから「大地」の神ゲブと「天空」の女神ヌトが生まれる。そしてこの男女の神々の交わりにより「王権」と「生命」の神オシリス、「玉座」を象徴する女神イシス、「死」の神セトとその妻のネフティス女神が生まれ、それに王家の守護神ホルスがオシリスの息子として加わって、「オシリス神話」の原形が作られたとされるのである。

神の創造した宇宙(秩序)のなかに「生命」だけでなく「死」も含まれるとされたことは、「死」が不可避である理由を説明したものであり、セトによるオシリスの殺害は、「生命」が「死」によって倒される宿命を象徴しているとみることができるだろう⁷⁹⁾。オシリスが復活を遂げて来世の王となり、現世の王権が息子のホルスによって継承されることは、王権の不滅だけでなく、「生命」が「死」という運命を経て(来世で)永遠のものとなることも示しており、はかない現世の後には永遠に続く来世があるとする信仰の支えとなった。死を経験することで永遠の生命を得たオシリスは古代エジプト人の憧れの的となり、この神と同じように死後の復活・再生を果たすことは、彼らの切なる願いとなる。

オシリスは「王権」の神でもあったから、死後にそのような形で永遠の生命を得るのは、当初は国王のみに許された特権であり、太陽神のように死と再生を繰り返すとされたのも、やはり最初は国王だけであった。しかし、やがてそれらの復活・再生の道は王以外の人々にも開かれ、死者は太陽神の永遠の旅に同行することも、オシリスのように冥界で無限の時を過ごすこともできるとされるようになる。ラーとオシリスの信仰を中心とするこのような来世観念は、古代エジプトの来世思想の基軸として強い影響力を持つこととなるのである。

4. 葬祭慣行と死者観念^{1) 2) 4) 5) 8)}

死後の再生・復活の「手続き」となる葬祭慣行には死者を来世に復活させる儀式(「葬祭儀礼」)のほか、来世の生活に必要なものの準備が含まれていた。すなわち現世の「続き」である来世のため、住居となる「墓」と生活用品としての「副葬品」が用意されたほか、飲食物もしばしば副葬され、さらにそれを供物として捧げる「供養」が、葬儀の後も続けられた。そして来世の生活には現世と同じく「肉体」が必要であるとされ、そこから遺体をミイラにして保存するという独特の慣習が生じた。

「肉体」が来世の生活に必要なとされたのは、ひとつには肉体に備わった知覚や運動などの機能が、来世の生活にも欠かせないと信じられていたためであろう。

しかし「肉体」に期待されていた役割はそれだけではない。古代エジプト人は「肉体」のほかにも「魂」にあたる2つの概念—カァとバァ—や心臓、名前などいくつかの要素が人間を構成していると信じていた。それらは来世においても必要とされていたが、とりわけ「肉体」とカァ、バァの結びつきが、死後の再生・復活のために大きな意味を持っていたと言える。

「カァ」は、おそらく「生命力」に近い意味を持つ概念で、人間の誕生と同時に、同じ姿の分身として作られるとされていた。カァは人間が生きている間はその「肉体」に宿って飲食物を摂取し、人間の生活を支えるが、人間が死ぬとともに「肉体」から離れるとされ、それゆえ死者の再生・復活のためには、この離れたカァを「肉体」に戻さなければならぬと古代エジプト人は信じていた。墓に埋葬された「肉体」に宿ることによってカァは供物を食べられるようになり、それが来世における死者の「生存」を可能にする信じられていたのである。すなわち「肉体」は、カァの拠り所とするためにも保存されなければならなかったのであり、「葬祭儀礼」の究極の目的も、このカァと「肉体」の再結合を実現することにあつたと言えるだろう。

この結合によって復活した死者は「アク」と呼ばれ、冥界で永遠の時を過ごすとされたが、現世にも影響力を及ぼすと信じられていた。そのため古代エジプト人は、病気などの災難に直面すると亡き肉親の「アク」にしばしば助けを求め、時には「アク」に宛てた手紙(「死者への書簡」)をパピルスや供物容器の表面に記して墓に置くことがあつた。これは死者が家族や社会の一員とされており、生者との絆が供養を通じて保たれていたことを示している。

「人格」あるいは「個性」と解釈される「バァ」は、頭部は死者本人、胴体は鳥という姿で表現される。バァはカァと同じく、墓に埋葬された「肉体」を拠り所としなければならなかったが、カァとはちがって、昼間は自由に墓の外に出てどこにでも行くことができ、太

陽神の永遠の船旅に加わることをさえてできると考えられていた。このバアを死後に持つのは、当初は王の特権だったと思われるが、やがてそれは王以外の死者にも許されるようになる。バア概念には、墓や地下の冥界の持つ暗い一面に対する不安や、現世の楽しみを死後も続けたいとする願望が反映していたと言えるかもしれない。

5. 来世観念の変遷：古王国時代まで^{1) 2) 8)}

エジプトにおける来世観念の存在を示す最古の証拠は、この地で農耕が開始された紀元前5500年頃に見ることができる。その当時、人間の遺体は砂漠に浅く掘った墓穴に埋葬され、飲食物や生活用品が副葬された。副葬品の存在は、来世を現世の「続き」とみる信仰がすでに存在していたことを示している。またこのような方法で埋められた遺体は、高温乾燥の砂の影響で「自然ミイラ」となる場合があり、それを目にした人々の心に、来世の生活にも「肉体」が必要であるとする観念が生じ、それが人工的なミイラ製作につながった可能性があると考えられている。

やがて社会の発展に並行して多くの副葬品を納めた大形墓が出現し、初期王朝時代には、国土統一を成し遂げた王とそのもとに仕える貴族のために大規模な墓が造営されるようになった。彼らの墓は、副葬品の貯蔵室に囲まれた玄室からなる地下構造の上に、四角い塚や煉瓦造りの構造物（マスタバ）をのせたもので、マスタバの内部にも貯蔵室が作られ、飲食物を納めた容器や食器、道具類など膨大な数の副葬品が納められた。塚やマスタバの周囲には殉死した召使たちの墓が作られ、王墓にはさらに、王の葬祭・供養のための建物か来世の王宮と思われるもの（「葬祭周壁」）が付属していた¹⁰⁾。王と貴族のためのこのような埋葬方式は、来世を現世の「続き」とみる来世思想の延長線上にあるものであり、彼らが来世で現世と基本的には同じ地位を保つとされていたことを示す。

また第2王朝時代の貴族の墓碑には、死者の姿とともにさまざまな供物の浮彫が刻まれているが¹¹⁾、それは図像や模型が実物の代わりとなり、呪術によって来世で現実化するという原理（「代用の原理」）にもとづいたものと思われる¹²⁾。子孫による供養が中断された場合の対策でもあるこの原理は、古代エジプトの来世観念・葬祭慣行において重要な位置を占めるようになり、それにもとづく彫刻や浮彫、壁画が、「葬祭のための芸術」として、エジプト史を通じて発展していくこととなる¹³⁾。事実、召使たちの殉死の風習は古王国時代には姿を消し、そのかわりに召使の姿を表した彫像や浮彫が、副葬品や墓の装飾のなかに広く見られるようになるのである。

古王国時代には王墓として大規模な石造ピラミッド¹⁰⁾が出現するが、第3王朝ジョセル王の「階段」ピ

ラミッドはその最初の例であり、6段の階段状をなすピラミッド本体が北側の葬祭神殿をはじめとする付属建造物群とともに「ピラミッド複合体」を構成した。この複合体には、来世における王の特別な立場が示されていると言える。たとえば付属建造物のなかには、国王の地位と活力を更新する「セド祭」用の建物を模倣した石造建築が含まれるが、これは王が来世においても永遠に王位につくことを暗示している。また、ピラミッド本体が階段状に作られ、葬祭神殿が北側に設けられていることについては、亡き王の魂がこの巨大な階段をつたって昇天し、不滅の存在である北天の周極星になるとする信仰を示したものとされている。

第4王朝時代になると、ピラミッドは方錐形の「真正」ピラミッドとなり、「ピラミッド複合体」も、ピラミッド本体の東側に葬祭神殿を配置する構造へと変化する。この「真正」ピラミッドは規模が大きく、ギザにあるクフ王のピラミッドの造営にはおよそ230万個の石材ブロックが使われ、専門の職人と徴用された農民からなる約2万人の労働者が動員されたとみられる。これほどの大事業が行われた背景には、王の強大な権力を支える信仰の存在があったと考えられる。

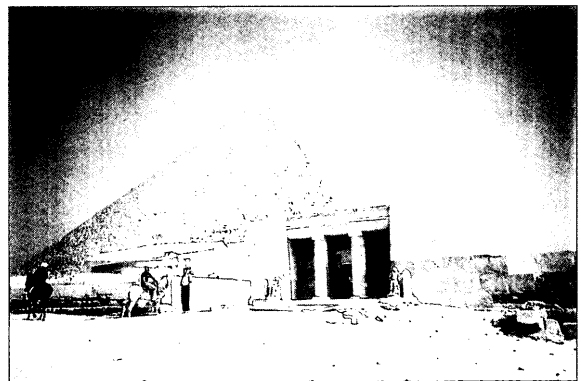


図4. クフ王のピラミッドと貴族のマスタバ（手前）

「真正」ピラミッドの形状は太陽光線を表現したものとみられるが、これは亡き王が光線をつたって太陽神のもとに上ることを意味しており、葬祭神殿の位置が日の出の方角である東に移ったことと並んで、王権と太陽神ラーの密接な関係を物語っている。この時期に王の称号として使われるようになった「太陽神の息子」（サア・ラー）は、そのような王の立場を明確に示したとも言えるだろう。太陽神は世界（エジプト）を生みだした創造神ともみなされており、王はその息子（代理）としてエジプトを治め、死後は父なる神の太陽舟に同乗して永遠の旅を続けると信じられていたのである。エジプトの国民にとって、創造神の代理を果たす王は現世の秩序と繁栄を保証する存在であり、そのための奉仕は自分たちの幸福に直結する当然の義務とされていたであろうが、とくにピラミッドの造営は、王個人だけでなくエジプト国民全体の来世の保証にも

つながるものであった。なぜなら王のもとで秩序と繁栄を約束された現世の「続き」が来世においても実現するためには、王が死後に復活・再生を逃げるのが何より重要だったからである。

「ピラミッド複合体」が暗示する王の来世、すなわち「王が死後に神々の一員として永遠の生命を得る」という観念は、第5王朝末期以降のピラミッドの墓室に王のため刻まれた葬祭文書『ピラミッド・テキスト』に示されている。それによると王は死後にバアとなり、オシリス神として復活するだけでなく、ピラミッドの形状で示される階段や太陽光線などを利用して昇天し、様々な神々や周極星となるほか、太陽神の永遠の旅に随行し、この神に同化することもできるとされていた。

それでは王以外の人々の来世はどのようなものだったのだろうか？ 貴族の墓は石造のマスタバか岩窟墓であり、玄室に通じる堅坑の上には供養のための礼拝室が設けられるのが普通だった。この礼拝室には、供養が行われる際に墓主のカアの出入口となる扉形の石碑（「偽扉」）や、カアの拠り所となる彫像が安置された。またその壁面には、供物の前にすわる墓主の姿、家畜の屠殺や農作物の収穫を行ない、そこから得たものを死者のもとへと運ぶ召使たちの姿などが表現されたが、これらは「代用の原理」にもとづき、来世で現実になるとされていた¹²⁾¹³⁾。壁面にはさらに、死者のために食物や移動の自由などを保証する呪文（「供養文」）が刻まれたが、そこにはそのような便宜が神々や王から与えられることが明記されており、彼ら貴族の来世が王からの恩恵とされていたことがうかがえる。おそらく当時の貴族たちが思い描いた来世とは、冥界の支配者となった王のため生前と同じように仕え、その寵愛のもとで不自由なく暮らすというものであり、彼らが現世で王の臣下として享受していた豊かな生活の「続き」だったと言えるだろう。この時期の貴族のミイラが樹脂に浸した亜麻布で生前の外見を復元し、それに衣服を着せたものだったことは、そのような当時の来世観念の反映とみることができる²⁾。

貴族のための豪華な葬祭慣行は、農民をはじめとする大多数の人々にとって無縁のものだったが、彼らの来世観念もおそらく貴族のそれと本質的には変わりがなかったと思われる。王の君臨するエジプトで自らの立場に満足しつつ暮らすことが彼らの唯一の生き方であり、王に対する忠実な奉仕が、臣民としての現世と来世を彼らに保証する道だったのである。古王国時代の来世観念は、理想的な世界とされた現世のイメージを来世に持ち越そうとしたもので、その中心には王の再生・復活があったと言えるだろう。

6. 来世観念の変遷：第一中間期から新王国^{1) 2) 8)}

しかしこのような考え方は、王の統治によって秩序と繁栄が約束されていたはずの古王国が結局は崩壊し、

混乱の時代である第一中間期が訪れると説得力を失い、人々は来世を自力で確保する道を模索しなければならなくなる。王権が再び確立された中王国時代にもこの状況に変化はなく、かつては王のものだった『ピラミッド・テキスト』の呪文が貴族や地方豪族にも利用され、それに新たな呪文を加えた葬祭文書『棺柩文』が、彼らの棺に記されるようになる。こうして「神としての復活」は、王以外の人間にも可能となり、少なくとも『棺柩文』を記した棺を用意できる者なら誰でも、死後にオシリスとして永遠の生命を獲得し、あるいは太陽神の永遠の旅に加わることができるとされるようになったのである。この時期にミイラの形態が全身を包帯で巻いた「繭」状のものへと変化することも、このような新しい死者観念を示したものと言えるかもしれない²⁾。

しかし『棺柩文』は、来世の道筋を示した案内図とも言うべき「二つの道の書」など、かつての『ピラミッド・テキスト』に見られなかった特徴もいくつか備えている。なかでも特に重要な意味を持つのは、その呪文のなかに示された「死者の審判」⁴⁾の観念である。すなわちあらゆる死者は来世の神々が判事となる法廷で裁かれ、そこで生前に善人であったとされた者だけが来世で永遠の生命を得られるとされるようになったのである。

このような観念は『棺柩文』が生みだされた当時の社会状況を背景として生じたものとみられる。古王国の崩壊は、王に対する奉仕が富や地位など人生における幸福と来世の保証につながるとする旧来の価値観の再検討を促すこととなった。いまや秩序とは何か、それを再建し、維持するためにはどうすべきかが問題となり、そこから王とその臣民である人間の積極的な「社会正義」実現が必要とされるようになったと考えられる。そして地位や富の獲得よりも1人の人間として正しく生きることこそ肝要とする倫理的な価値観が重視されるようになり、それが来世観念にも持ち込まれたものが「死者の審判」と思われるのである¹⁾。これは豪華な墓や盛大な葬儀には縁がなく『棺柩文』の記された棺さえ入手できない貧しい人々にも、永遠の来世への道を開くこととなった。しかしこの観念は、墓の造営やミイラ製作といった旧来の葬祭慣行に取って代わることはなく、両者は再生・復活の手段として、エジプト文明の終焉の時まで共存する^{1) 4) 5)}。死者の来世がオシリスの支配する冥界でもあり、ラーのたどる永遠の旅路でもあったように、来世に至る道筋もまた、何通りもありうるとされたのである。

新王国時代初期に成立した『死者の書』は、『ピラミッド・テキスト』と『棺柩文』の流れを汲む葬祭文書であり、呪文の内容を示す「挿絵」によって来世を視覚的に表現している点で「二つの道の書」の延長線上にあるものと言えるが、「死者の審判」の観念もまた、

この『死者の書』において確立したとみることができ、この葬祭文書には死者が太陽舟に乗るための呪文も見られるものの、再生・復活のプロセスとして重視されているのはむしろオシリスの支配する冥界への復活である。「死者の審判」はそのための最も重要な段階とされ、その手順が呪文と挿絵によって詳しく示されているのである¹⁾²⁾⁴⁾⁸⁾。

それによると、死者（あるいはそのバァ）は、来世で待ち受ける様々な困難を呪文によって切り抜けたあと、裁判長である冥界の王オシリス神や判事となる42柱の神々が着座する審判の場（「2つの真理の広間」）に到着する。死者はまず、自分が生前に悪事を犯さなかったことを神々の前で誓う「否定告白」を行う。そこには虐待や殺人、暴力から神々や死者に対する冒瀆、果ては嘘をつくことや痲癩を起こすことまで約70種類の「罪」が挙げられ、死者は生前、そのような悪行に手を染めなかったことを、最初はオシリス神の前で誓い、次に42柱の神々の前で（1柱の神につき1つずつの悪行という割合で）誓うとされた。

この「否定告白」とともに審判を構成するのが「心臓の計量」である。ここでは死者の理性や感情の中心とされていた心臓が、正義と真理を象徴する概念であり、ダチョウの羽で表されるマアトとともに秤にかけられる。死者のおこなった「否定告白」が偽りであれば心臓はマアトと釣り合わずに秤が傾き、秤のそばに控えている怪物が心臓をむさぼり食うとされた。そのようにして心臓を失った死者はいわば「無」の存在となり、再生・復活の望みをまったく絶たれることになる。一方、もし「告白」が真実であれば秤は釣り合いを保ち、それによって潔白を証明された死者はオシリスの前に導かれて再生・復活が認められ、「供物の野」とも「イアルの野」とも呼ばれる楽園で永遠に生きるとされたのである。

もちろん『死者の書』はあくまでも再生・復活のための「呪文」であり、それを利用すれば「審判」の合格が保証されると信じられていたであろう。しかしそれはむしろ「否定告白」に示される細かく厳しい倫理基準を「努力目標」として、それを間違いなく達成するための補助手段を用意したものともみることができる⁴⁾。理想はあくまでも理想であり、人間が心ならずもそれに反する可能性があることを古代エジプト人は良く承知していたのである。

「審判」に合格した死者が住む「イアルの野」は、水路や川が流れ、その兩岸には果樹が生え、花が咲き、農地が広がる世界である。そこは病気や飢饉などの災いとは無縁の穏やかな気候と豊かな収穫に恵まれた理想の世界であり、死者は神々と交流し、美しい衣服や豊富な飲食物を与えられ、農民として牧歌的な日々を過ごすこととされた。これはまさに現世のエジプトをもとにした「理想郷」であり、ナイルの谷での生活を愛し、

それを死後も続けることを求めた古代エジプト人の願望を反映したイメージと言えるだろう。

7. おわりに

地下の冥界や太陽神の船旅など彼らの来世思想に共存する多様な観念は互いに補いあって、古代エジプト人が願ってやまなかった永遠の来世のイメージを豊かに構築していった。また「死者の審判」の観念は、現世の正しい生き方が来世の保証になるという倫理的・精神的な価値観を示すことによって、当時の人口の大多数を占める貧しい一般庶民にも、死後に永遠の生命を獲得する道を開いたのである。そしてそれは、「いかに死を迎えるか」という問題が結局は「いかに生きるか」につながるという、現代にも通じる死生観を示していると言えるだろう。

文 献

- 1) 屋形禎亮：この世とあの世の生活—古代エジプト人の死生観—, 三笠宮崇仁編, 生活の世界歴史：1：古代オリエントの生活. p221-274, 河出書房新社, 東京, 1991.
- 2) Taylor, J. H. : Death & the Afterlife in Ancient Egypt. The British Museum Press, London, 2001.
- 3) 内田杉彦：古代エジプト人と病氣. 明倫歯誌, 3(1) : 60-66, 2000.
- 4) Wentz, E. F. : Funerary Beliefs of the Ancient Egyptians : An Interpretation of the Burials and the Texts. Expedition, 24(2) : 17-26, 1982.
- 5) マーネイン, ウィリアム・J. : これを持ってあの世へ—古代エジプトにおける死と来世, ヒロシ・オオバヤシ編 (安藤泰至訳), 死と来世の系譜. p85-106, 時事通信社, 東京, 1995.
- 6) Griffiths, J. Gwyn : The Origins of Osiris and His Cult. E. J. Brill, Leiden, 1980.
- 7) Te Velde, H. : Seth, God of Confusion : A Study of His Role in Egyptian Mythology and Religion. pp81-98, E. J. Brill, Leiden, 1977.
- 8) Lacovara, P. et al. (ed.): Mummies & Magic : The Funerary Arts of Ancient Egypt. The Museum of Fine Arts, Boston, Boston, 1988.
- 9) Tobin, V. A. : Theological Principles of Egyptian Religion. pp103-124, Peter Lang, New York, 1989.
- 10) レーナー, マーク (内田杉彦訳) : 図説ピラミッド大百科. 東洋書林, 東京, 2000.
- 11) Saad, Z. Y. : Ceiling Stelae in Second Dynasty Tombs from the Excavations at Helwan. Imprimerie de l'institut français d'archéologie orientale, Cairo, 1957.
- 12) 屋形禎亮：エジプト美術と来世信仰. 米国・ブルックリン美術館秘蔵名品展：エジプトの美. 読売新聞社, 東京, 1984.
- 13) 内田杉彦：エジプト美術入門. 明倫歯誌, 4(1) : 76-81, 2001.